

・身体と音楽との融合・ 空間的閉塞感の克服のために

と き：2006年11月12日(日曜日)

ところ：京都女子大学・学生ホール(D校舎) 14時～16時

講 師：小松正史(京都精華大学専任講師・ピアニスト)

矢作聡子(ダンサー)

【前半】身体と音楽との融合 公演

【後半】矢作+小松の対談、参加者とのコラボレーション



テーマは、「身体と音楽との融合」。この設定の背景には、矢作と小松両者が閉所に恐怖感を突然感じたという経験があり、狭い空間に入ったときの「出口のない感じ」に対し、身体的拒絶感が表れてしまう傾向に、一石を投じたいことがきっかけにある。

この現象は、大げさに言えば、現代社会システムが有意識・無意識にもたらず、ある種の権力や圧迫感が、大きく影響している。特に幼児は感覚が無防備なので、そうした圧迫感に対し、過剰の反応を示すことがある。

将来、このような感覚を敏感にもつ幼児を対象として活動する児童学科の学生は、そうした違和感に気づき、反応し、知恵や工夫を凝らして、「開放」する必要性が求められる。

当公演の前半では、身体表現(ダンス)と音楽表現(ピアノ即興演奏)によって、身体に意識を向ける。そして、後半では、参加者とともに身体表現のワークショップを行い、閉塞からの跳躍を、皆で共有することを予定している。